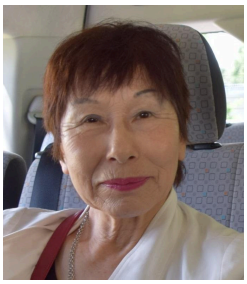
祝！日本被団協ノーベル平和賞授賞式行動ツアー　参加者略歴

青木　清子（あおき　きよこ）

広島被爆　1941年7月24日生まれ　被爆当時4歳
市川被爆者の会 事務局長
千葉県原爆被害者友愛会 理事

当時、爆心地から郊外に避難する人々の救援を手伝う。
佐々木禎子さんが白血病を発症し亡くなったことを悼み、彼女ら原爆の犠牲となった子どもたちを記念する原爆の子の像を建てる運動が起きたとき、自身も街頭募金に加わる。
その後広島大学を出て美術の教員となり、旅行時にはヒロシマの絵葉書を携帯し、世界の人々に原爆の悲惨さ、平和の大切さを訴え続けてきた。現在は小中学校を訪れ子どもたちに被爆体験を語る運動に力を入れている。



倉守　照美（くらもり　てるみ）

長崎被爆　1944年1月8日生まれ　被爆当時1歳
長崎県長崎市在住

当時は母、兄、姉とともに自宅の裏山の防空壕に避難しており助かる。
しかし三菱造船にいた父は被爆。10年後「癌」と診断され闘病するも亡くなる。その3年後、兄、姉も癌に侵され他界。
家族の死をきっかけに平和活動の拠点である県手帳友の会に入会。
被爆当時の記憶はないが「二度と被爆の惨状と悲劇を繰り返してはならない」との想いでトルコ、スペインのゲルニカ、韓国、NYなど数十回の証言活動に尽力。2018年ピースボートおりづるプロジェクトに参加。
「長崎を最後の被爆地に」と現在も精力的に活動を続けている。

佐久間　邦彦（さくま　くにひこ）

広島被爆　1944年10月20日生まれ　被爆当時生後9か月
広島県広島市在住

母親とともに自宅にて被爆。
洗濯中だった母親は、突然の閃光を目撃するも変わらない外の景色に異様さと危険を感じ、自身を背負って避難所へ向かう。避難所に向かう最中に黒い雨に遭遇した。
その後10歳と11歳頃に腎臓と肝臓を患い、今でも当時の苦しさを思い出す。

永野　和代（ながの　かずよ）

広島被爆　1944年2月1日生まれ　被爆当時1歳6か月

自身が還暦を迎えるにあたり、被爆者と向き合うべく山口原爆被害者の会に入会。
2008年ピースボートおりづるプロジェクトに乗船。船内において「若いヒバクシャの想い」を立ち上げる。船内の経験から、記憶のない若年被爆者でも核兵器の脅威、平和の尊さを伝えることが出来ると実感し、下船後は自分なりの継承方法について考え、小中学、大学、一般の人々に継承活動を始める。
2021年4月に山口市原爆被害者の会会長に就任。
2023年9月　被爆当時中学生だった実在の人をモデルにした紙芝居「充くんは生きたかった―康おじいちゃんの話―」を制作。

西本　多美子（にしもと　たみこ）

広島被爆　1940年11月25日生まれ　被爆当時4歳

爆心地から2.3㎞にある広島市段原町の自宅で被爆。3日後に父方の実家に疎開。三年後広島市に帰広。
1963年から原水協運動に参加。1969年に夫の転勤で札幌、金沢に移るも被爆者運動は継続して参加。
石川県原爆被災者友の会では2020年の会が解散するまで会長を務める。
またコスタリカやオランダ、フィリピンなど多くの国外で被爆証言や原爆パネル贈呈などの平和活動に参加する。

橋爪　文子（はしづめ　ふみこ）

広島被爆　1931年1月5日生まれ　被爆当時14歳
神奈川県鎌倉市在住

学徒動員時に爆心地から1.5㎞南にある広島貯金支局で被爆。全身にガラス片が刺さり、特に右耳上部の血管が切れて大量出血する。生死の間をさまよいながらその夜は猛火の市内で過ごす。翌日死の街・広島市内を縦断して自宅跡に戻り、重症を負った家族と再会する。半世紀を経てようやく被爆体験について語れるようになる。
その後、反核海外ひとり行脚、作詩、執筆活動をおこなう。被爆以来現在に至るまで健康体だったことは1日もない。

花垣　ルミ（はながき　るみ）

広島被爆　1940年3月25日大阪市生まれ　被爆当時5歳
京都府京都市在住
京都原水爆被災者懇談会 世話人代表
被爆者証言の世界化ネットワーク（NET-GTAS）顧問
非核の政府を求める京都の会 共同代表

爆心地から1.7㎞の叔母の家で被爆。逃避途上の悲惨な状況と強烈な人間を荼毘にふす臭いで失神。しばらくして意識は回復したが記憶を失う。58年後、突然記憶が戻る。2005年、NPT要請団で訪米し、そこでの被爆者の被爆体験の話に衝撃を受け「被爆者として生きる」ことを決断。以降、語り部として国内100か所程、海外では2010年、2015年の訪米時に証言をおこなう。とくに2010年オハイオ州では一般家庭を含めて10か所でおこなった。

林　勝美（はやし　かつみ）

広島被爆　1942年6月4日生まれ　被爆当時3歳
兵庫県加古川市在住

爆心地より西側1.3kmの家の縁側で被爆。当時、外が真っ暗になったのを覚えている。家は倒壊したが自身は怪我も火傷もしなかった。爆心地より迫って来る火事による類焼から逃れるため、家の下敷きになった14歳の姉を人力で引き出せず、そのままにして逃げた。歩いて避難する途中、電車の鉄橋の枕木が燃えているのを見たのを覚えている。また、爆心地より東側1.7kmで被爆した18歳の姉は、2週間後に放射線の影響で死亡した。
現在、小中学校などで被爆体験のかたりべ活動をおこないながら、兵庫県と加古川市の被爆者団体の役員としても核廃絶運動に関わっている。

福島　富子（ふくしま　とみこ）

長崎被爆　1945年1月21日生まれ　被爆当時生後6か月半
神奈川県葉山町在住
神奈川県原爆被災者の会 副会長　葉山支部 会長

爆心地より2.5kmの自宅で被爆。自宅と爆心地の間に小高い丘があり直接的な被害を免れる。4歳の頃に家族より一人離され親戚の家に預けられて、被爆を知らず育つ。
親戚の家で着物に親しみ、現在はPeaceの文字を刺繍した平和の帯で被爆証言をおこない、2022年第1回締約国会議では大学生にその平和の帯を託す。
被爆当時の記憶はないが、2024年4月より現在94歳の長崎被爆者の交流証言者に認定され、講話活動をおこなっている。
2015年、NPT再検討会議要請代表団としてニューヨークへ渡米した。

三田村　シズ子（みたむら　しずこ）

長崎被爆　1941年12月20日生まれ　被爆当時3歳
長崎県長崎市在住

爆心地から4㎞地点の自宅にて食事中に被爆。鋭い光を浴びた直後、防空壕に避難し家族は無事。戦後は看護師として勤め、原爆に深い関心はなかったが、一緒に被爆した姉二人、被爆二世となる自身の娘・姪を含む4名が癌を発症し他界。
自身も大腸癌、子宮体癌を患い、徐々に放射能の恐ろしさを感じ反核平和活動に関心を持ち始めた。現在は「平和案内人」や、紙芝居を通して被爆体験を伝える活動に従事している。

森川　高明（もりかわ　たかあき）

広島被爆　1939年5月4日生まれ　被爆当時6歳
広島県広島市在住

爆心地から300mの中島地区天神町に居住していたが、原爆投下5か月前に市中心から9kmに疎開。当日、父は市内のビル内で直接被爆し、自身は母と3歳年上の姉とともに疎開先で黒い雨を浴び被ばく。
父は63歳の時に肝臓がんで他界。母は原爆ぶらぶら病を発症、最後は胃がんで64歳の時に他界した。
2016年ピースボートおりづるプロジェクトに参加し、政治家・市民団体への被爆体験を披露。米国ニューヨークでは国連第一委員会のイベントで、核禁法討議開始の動議を前に、被爆証言を通じて核廃絶を訴えた。
現在は、海外から広島を訪れる訪問客を中心に証言活動を続けている。

柳生　研太郎（やぎゅう　けんたろう）

広島被爆　1942年5月10日生まれ　被爆当時3歳

広島県尾道市生まれ。当時両親と被爆した。
高校卒業まで広島市で過ごし、大阪、名古屋の大学卒業後、兵庫県と静岡県で高校教員を3年間経験。以後30年間を大阪の民間会社に勤務し定年退職後、少年期より好きであった絵を描くことを復活。
2010年ピースボートおりづるプロジェクトに乗船し、各国で手作りの紙芝居をもとに核戦争の悲惨さと核廃絶を訴えた。
帰国後、紙芝居をもとに絵本「青い空」を出版。現在はその絵本をプロジェクターで映し芦屋市内の小学校などで証言活動をしている。

淺田　恵子（あさだ　けいこ）

被爆二世　1962年2月22日生まれ
福岡県糸島市在住

両親ともに長崎で被爆（父は14歳、母は8歳の時に市内で被爆）
現在は糸島市在住であるが、二人暮らしの両親の様子見がてら、月に二度ほど帰省している。
40数年前、英語教諭免許を取得するも教職には就かず、認知症や発達障害のある方のケアに従事。その傍ら、父の被爆体験記や、自身の五行歌集、他者の自伝や歌集などを編集し、アマゾンのオンデマンド印刷にて出版している。（※五行歌とは五行で綴る口語短歌）

伊野　博子（いの　ひろこ）

被爆二世　1955年2月5日生まれ
兵庫県神戸市在住
県立洲本高校定時制勤務

父が長崎で入市被爆。享年81（2009年没）
父、伊野 泰輔（いの たいすけ）は17歳の時、赤紙召集され姫路46部隊に入隊。長崎へ移動後、救助活動、死体の片付けなどの作業を命じられ入市被爆となる。
自身は5年前に兵庫県被爆二世の会に入会し、父の被爆証言を語り継ぎ核兵器廃絶に向けて原爆の実相を伝承している。

磯部　典子（いそべ　のりこ）

被爆二世　1951年3月6日生まれ
静岡県磐田市
静岡県原水爆被害者の会　西遠支部長

父が広島にて爆心地から1.2kmで被爆。
父、杉山秀夫（すぎやま ひでお）は静岡県原水爆被害者の会を創立し多重癌と闘病しながらも亡くなるまで被爆者運動に尽力（享年87歳）
自身、父の証言活動を記憶、継承し語り継ぐ活動をしながら、同時に被爆二世の健康被害の実態の解明を求めている。元保育士。5人の母親。
趣味は薬草作り。海外での交流時に喜ばれたパタパタ折り鶴を今回のオスロにも持参。

大村　義則（おおむら　よしのり）

被爆二世　1956年6月30日生まれ
愛知県原水爆被災者の会 副理事長
日本被団協被爆二世委員会 副会長
原水爆禁止愛知県協議会 代表理事

父が長崎にて入市被爆（当時21歳）
陸軍に徴兵されて九州北部にいた父は、8月10日「残務整理をせよ」との命令を受けて長崎市内に向かう。ガレキの中から、被爆し焼けた死体を引き出し、山に積みあげて焼いた。夏の暑い時で、死体は強烈な腐敗臭を放ち耐えられなかったと語る。当時の話をすると「匂いが戻ってくる」と言って話したがらなかった。

尾崎　庸美（おざき　つねみ）

被爆二世　1951年年10月21日生まれ

家族5人が長崎で被爆
（被爆地詳細）祖父：大橋兵器工場、祖母・母・兄：稲佐町の家、父：飽の浦町三菱長崎造船所
母たち3人がいた家は稲佐山から派生する尾根の陰になっており全壊したものの一瞬を逃れて助かる。生後2カ月の兄が寝ていた布団は壊れた家の梁が突き刺さっていた。安否が心配された祖父も、夕方杖を突きながら帰宅。
母から戦前や戦後、憲法の話などを聞いて育つ。加入した勤労者山岳会、勤務した民主商工会で、平和や民主主義、憲法9条などを学ぶ。被爆50周年の際に民商婦人部で「業者婦人がつづる被爆証言集　あじさいの街から」の編集に7年間携わり、約100人の被爆者の話を聞く。
祖父母、両親とも癌、母は甲状腺障害も発症。亡くなる前の「憲法9条は守らんばいけん」との発言を遺言と思い現在の運動に至っている。

小林　立雄（こばやし　たつお）

被爆二世　1948年11月30日生まれ
日本科学者会議会員　日本AALAの常任理事　宮城県原水協理事

広島県江田島の海軍兵学校の教員だった父が救援のため入市被爆。
学生は救援に派遣せず、教員だった父は原爆投下直後、翌日、翌々日と広島市内の爆心地付近に1週間ほど救援に入る。
自身は大学と大学院で物理学を研究し、原発と原爆がコインの裏表の関係であることを深く理解する。放射能、放射線は生命と相いれないことを学問と科学の到達を判断の礎とすべき、と訴えている。所属団体で核兵器と原発（核発電）廃止に積極的に取り組んでいる。

嶋田　眞由美（しまだ　まゆみ）

被爆三世　1977年9月12日生まれ
長崎県西海市在住　主婦

母方の祖父が、爆心地より1.2kmの勤務地で被爆（1975年没）
自身は、長崎原爆被災者協議会の副会長をしている伯母の「世界広報プロジェクト」のサポートをしている。

下村　次弘（しもむら　つぎひろ）

1940年2月15日　東京都大森生まれ
岩手県被団協 副会長兼事務局長

5歳の時に父親の実家、岩手県真城村（現在：水沢市真城）に家族6人で疎開。岩手大学を卒業後、教員として県内小・中学校に勤務。
35歳の夏に初めて、父が広島で被爆したことを母から聞く。父自身は詳しいことは語らず数年が過ぎ、1980年の原水爆禁止世界大会（広島）に行くことになった。
その後父の体調が悪くなり検査の結果肺癌が見つかるも「手術は無理」と宣告される。急遽「被爆者手帳」の申請をやるよう説得するが父本人は拒否。周りの説得でようやく納得し、県被団協の援助で申請するが「証人が必要」など手続きに時間を要し、被爆者手帳が交付されたのは父が亡くなってから一週間が過ぎた日だった。
自身は退職後、被団協運動に身を捧げようと決意し20数年が経つ。現在、県内の被爆者と二世・三世を中心とした仲間と積極的に核兵器廃絶の運動をしている。日本政府に核兵器禁止条約参加を訴える署名を、県知事などを含め全県で6万筆近く集めている。

新宅　友穂（しんたく　ともほ）

被爆二世　1954年12月18日生まれ
神奈川県横浜市在住

父が17歳の時、広島で被爆。爆心地から2.6kmにある陸軍被服支廠の地下室にいたため熱線の直撃は浴びなかったが、皮膚が弱く皮膚病で苦しんでいた。その後、71歳で亡くなったが原爆のことはほとんど語らなかった。
父が被爆した場所を実際に歩いて、当時、父が見たであろう景色を想像してみると、心にとても大きな傷を受け、原爆を語ることができなかったのだと想いを寄せる。実際、自身に子や孫が生まれたときは被爆の影響がないかと秘かに心配した。核のない世界づくりのために尽力していきたいとの想いを強く持っている。

塚本　久美子（つかもと　くみこ）

被爆二世　1956年1月22日生まれ
福岡県大野城市在住（長崎市、広島市に居住経験あり）
NPO法人筑紫原爆被害者の会理事

母親の吉川広子が17歳の時に長崎で被爆。
普段は、実兄の吉川徹とともに会において活動をおこなっている。
毎年8月を中心に開催している「原爆資料展」におけるガイドの一人。職場は来春退職。
1977年～1981年に(当時)西ドイツへピアノ専攻のため留学する。戦時中、日独は同盟国だったが、ドイツは1945年5月に降伏したため被爆を免れた。「ドイツ人も、原爆投下は非人道的行為として反対する意識は強い」ことを滞在中に感じていた。

中村　典子（なかむら　みちこ）

被爆二世 1948年10月19日生まれ
兵庫県神戸市在住
兵庫県被爆二世の会会長

父が広島で直接被爆。享年87（2006年没）
父、松崎亨（まつざきとおる）は26歳の時、爆心地から1.7km地点で被爆した。
自身は2009年に慢性骨髄性白血病、2014年に甲状腺がんが発見される。この病気は父が被爆した影響が関係すると感じている。
2016年から「兵庫県被爆二世の会」の会長を務める。被爆者の平均年齢は85.28歳となり、被爆者本人が高齢のため語り部ができなくなるため、二世の会では被爆者の話を紙芝居やDVDにして残している。現在は、紙芝居を使って原爆のことを伝えている。

濱口　幸子（はまぐち　さちこ）
被爆二世　1948年1月2日生まれ

両親とも広島で入市被爆。
爆心地から5kmの向洋（むかいなだ）に住んでいたが、8月9日広島市内に入り入市被爆となる。母は当時、妊娠4か月だった。お腹の中にいた兄は生後14日目に他界。原爆の後障害から母は体調が悪く入退院を繰り返し、父は1965年に胃がん、1970年に肺がんを患い、1977年に60歳で亡くなる。母が亡くなって10年目、母の手記「こんな話がわかりますか」を二世の会から発行。これからも証言活動を続けていきたいと決意している。

橋爪　　祐司（はしづめ　ゆうじ）
被爆二世　1964年10月11日生まれ
神奈川県鎌倉市在住

母、橋爪文子（はしづめ ふみこ）が広島で被爆。
東京都にて誕生、幼少期より親の仕事などにより引っ越しを繰り返し、中学より鎌倉市に居住。読書や歴史に興味を持ち、人文科学方面を目指していたところ、社会福祉分野も向いているのではと勧められ日本福祉大学に入学。母の影響もありいのちと暮らしを守る仕事に携わりたいと考え、(公財)横浜勤労者福祉協会に医療事務として入職し現在に至る。親の生活支援の事もあり、2011年より家族で実家に戻り同居している。

原　佳与子（はら　かよこ）
被爆二世　1958年6月8日生まれ

両親とも長崎で被爆。
父方の実家は原爆投下の中心地の平和公園近くで、祖母と叔父二人が爆死している。
自身が大学進学時に他県で過ごしたことにより、他県の人々がいかに原爆について不知なのかを思い知る。
結婚時に被爆二世という事で多少の反対があった事をきっかけに、夫が長崎で弁護士登録し 1年目から原爆症裁判の弁護団に加入。その後30年以上活動するに至り、自身は事務所の事務局としてその活動を支えている。

矢野　真理（やの　まり）
被爆二世　1965年5月21日生まれ
母、倉守照美（くらもり てるみ）が長崎で被爆。

山本　緑（やまもと　みどり）
被爆二世　1953年11月27日 広島県呉市生まれ
神奈川県座間市在住

広島赤十字病院看護学生だった母が当時18歳のとき広島にて被爆。
90歳になる母と同居し「自分が生きている意味を知りたい」と閉ざしていた母の重い口から被爆体験の語りがはじまる。その語りを冊子にまとめ「光に救われた命」と題し自主出版。
その後、2023年母は95歳で他界。
母の「核は絶対ダメ！」との思いを伝えることを二世としての使命と感じ、現在は小学生や小中学校の教員、青年育成会、地元の消防署等で母の被爆体験を通し、被爆伝承活動を行なっている。
子ども達には「地球を救え！」と題し、核兵器で地球船に穴をあけたら、私たち地球乗組員は地球船もろとも沈没してしまう！と伝えている。

山本　裕治（やまもと　ゆうじ）

被爆二世　1955年4月20日生まれ
兵庫県神戸市在住
兵庫県被爆二世の会 運営委員
兵庫県原爆被害者団体協議会 事務局次長

母が爆心地より1.5㎞以内の広島市舟入町で被爆。2020年2月20日に他界。生前には原爆被害者認定医員の郷地秀夫医師の診察を受けていた。先生から勧められ、自身も被爆二世検診を受けるようになった。その際に郷地先生より兵庫県被爆二世の会も頑張って活動していると教えて頂いたことがきっかけで活動に参加。
現在は、会の運営などを中心に自身ができる活動をしている。

横山　江美（よこやま　えみ）

被爆二世　1952年4月14日生まれ
元杉並区議会（公明党）。杉並区平和市長会議加盟認定を勝ち取り、杉並中学生の広島訪問の道筋をつくる。

母が広島小柳町の財務局の官舎で被爆。一夜明け官舎に戻ると、庭に植えていたかぼちゃが黒く焼かれそれを食べて命を繋いだ。
自身は幼少期に、母に連れられ杉並区の原水爆禁止署名運動に参加。妹が母の被爆体験を聞き取り作文にした「かぼちゃの日」が教育出版国語の教科書に紹介され中学校で講演。
我が家の8月6日は、母が経験したようにかぼちゃを食べ母の体験を聞く日だった。結婚した二人の娘たちの家庭でもかぼちゃの日を継承している。

吉川　徹（よしかわ　とおる）

被爆二世　1952年9月18日生まれ
福岡市在住（18歳まで長崎市と広島市に居住）
福岡県被団協理事
NPO法人筑紫原爆被害者の会理事長

母が17歳の時に長崎で被爆。
毎年会の被爆者がおこなっている学校証言（小学6年生への平和学習の授業）を、初めて二世としておこなった。
NPO法人として地元5市自治体との連携を得て、市職員（現職・OB）への講演や、毎年8月を中心に市の施設内にて「原爆資料展」も開催している。
職場では在勤47年、勤続50年を目指している。

渡部　久仁子（わたなべ　くにこ）

被爆三世　1980年9月29日広島生まれ
特定非営利活動法人ANT-Hiroshima 理事

祖父母が広島で被爆。
広島を拠点に、核兵器廃絶、国際協力、平和教育活動など草の根のさまざまな活動を通じて国際平和構築を目指す特定非営利活動法人ANT-Hiroshimaの理事を務める。
原爆を生き抜いた被爆樹木を紹介する案内もおこなっている。漫画「はだしのゲン」の作者である中沢啓治氏のドキュメンタリー「はだしのゲンが見たヒロシマ」（2011）製作プロデューサー。
現在、広島赤十字病院 救護看護婦養成部の学生だった（被爆当時15）祖母、上野照子（うえの てるこ）の家族伝承者になるべく研修中。